

はじめに

本会は、1949(昭和24)年に東京都の寄生虫予防を推進する財団法人として都の認可を受け、事業に精励したところ、十数年でこの問題は著しく改善した。しかし、他の予防医学事業は今後重要性を増すと思われたので、1964年にその拠点となるべく保健会館本館を建築し、1967年に東京都から、「財団法人東京都予防医学協会」の認可を受けた。その後、予防医学は多角的に発展し、1995年までの約30年間に本会の事業は約10倍に拡大して施設が狭小となった。そのため2013年に検査研究センター棟を新築し、約50年を経過した保健会館本館を、2年間かけて事業を行いながら改修した。お蔭で、この工事で施設は美しく、使いやすく生まれ変わることができた。

なお、本年報にご執筆いただいた論文を、私は常に感謝しながら読ませていただいている。

たとえば、浅井利夫先生は、学校保健の心臓病検診で心音図不要論が一部にあるが、本会ではこれを用いて見逃されていた先天性心疾患を発見しているので、必要と述べておられる。村上睦美先生は、腎臓検診の尿検査の方法の変更の可能性を述べ、今後その結果で、対応したいと述べておられた。小児糖尿病健診で浦上達彦先生は、成人と小児期発症I型糖尿病では血漿で上昇する膵島自己抗体の種類が異なると報告し、脊柱側弯症検診で南昌平先生は、検診方法や診療体制の不統一による問題点を指摘された。村田光範先生は、小児生活習慣病検診の重要性をわかりやすく記載していただいた。

母子保健は、母子保健検査部が先天性代謝異常症のタンデムマススクリーニングを要領よくまとめて報告した。また、先天性甲状腺機能低下症と先天性副腎過形成症のスクリーニングは、杉原茂孝先生と鹿島田健一先生がそれぞれその成果と問題点を解説された。新生児スクリーニングで発見され、治療された成人のPKU19例を大和田操先生がまとめられ、治療に携わる医療従事者の必要条件を解説された。百溪尚子先生は、妊婦甲状腺機能検査方法の問題点を指摘され、性感染症検査では北村邦夫先生が、近年の病原微生物の多様化、性器外感染症の増加、低年齢化について述べ、予防の重要性を指摘された。

地域・職域保健では、須賀万智先生が定期健康診断の実施成績を述べ、健康づくりを支援する職場づくりを解説した。基本健康診査の中の胸部X線検査は金子昌弘先生が執筆され、デジタル化が普及しているので、読影の効率化を考えたいと述べた。

住民検査は田口直樹地域保健部長が報告し、特殊健康診断と人間ドックの成績は三輪祐一先生が、保健指導の成績は加藤京子健康増進部課長が人間ドック当日の特定保健指導の内容を中心に執筆した。超音波検査の実施状況は矢島晴美生理機能科長と小野良樹先生が執筆し、クリニックの外来診療報告も小野良樹先生が執筆した。その中で、本会のクリニックの特徴の1つに各種のがんの精度の高い診断があり、精力的に実施している関係者に敬意を表すると述べた。

各種のがん検診の中で、胃がんは小野良樹先生と富樫聖子放射線部科長が執筆し、早期がん率は81.8%であったが、進行がんの4例中2例は内視鏡検査を受けておらず、精検受診率の向上が必要であると述べた。肺がん検診と東京から肺がんをなくす会の成績は金子昌弘先生が執筆し、肺がんによる死亡を減少させるには、検診とともに喫煙率の減少が必要という。

大腸がん検診は小野良樹先生と森郁子臨床検査技師が執筆し、便潜血陽性者に対する内視鏡検査を増加する予定という。また、鈴木康元先生は、大腸がん死を減らすには精検受診率の向上が大切と述べておられる。子宮がん検診とレディースクリニックの成績は長谷川壽彦先生が執筆され、木口一成先生は子宮がん細胞診を中心に執筆された。また、子宮がん精密検診センターの成績は、伊藤良彌先生がわかりやすくまとめられた。

また、2013年度の乳がん検診で発見された69例の病期別、組織型別内訳を坂佳奈子先生が報告し、坂佳奈子先生と野木裕子先生、竹井淳子先生は、本会の乳房2次検診センターが、東京での数少ない精密検査施設の役割を果たしていることを解説された。

2013年度の事業を進めるに当たってご指導をいただいた東京都医師会、東京産婦人科医会、予防医学事業中央会、その他医学会の諸先生方に感謝する。

2015年3月

公益財団法人東京都予防医学協会
理事長 北川照男